

## 二席 沖縄県文化振興会理事長賞

春立ちぬ

長山しおり

孫の看病のため外出を控えていた私を氣遣って妹がランチに誘ってくれた。孫の病状も回復に向かっていることから、久しぶりに余所行きに着替え、待ち合わせ場所のホテルへ出かける。

丘の上に立つ二十階建ての老舗ホテルは、世界遺産の首里城の近くにある。ヤシの木や繁茂したガジュマルなどの緑に囲まれたリゾートホテルが悠然とした風情で私たちを迎えてくれた。三階の日本料理店で、着物姿の

仲居さんが案内してくれたのは庭に面したテーブル席だった。静かな佇まいの店内は、南側が大きなガラス張りの窓になっているため開放感に満ちた空間となっている。

私たちはしばらく中庭の植え込みや、今は観光客のいない眼下のプール、海風の渡る那覇の街の遠景などを黙って眺めた。

「見事なソテツだね」

庭の蘇鉄そてつの、幹から美しく伸びた濃緑の葉に妙な懐かしさを覚えながら私が言うと、

「そうだね……。そうそう、じつは私、水彩画教室に通っているの」

と、おもむろに少女のようないたずらっぽい目で私を一瞥してから、妹はバッグから一冊のスケッチブックを取り出した。

「えっ、水彩画教室？」

還暦を超えた妹の思いがけないことばと、突如、卓上に出現した透明感

のある色彩の静物画に私は驚いた。二か月前から地元の絵画サークルで学び始めたらしい。

自分の畑でとれたという南瓜かぼちゃとブロッコリーをモチーフに、初心者とは思えない丁寧なデッサンがなされ、優しい色合いの絵具で色づけされた水彩画が目の前にある。質感や、陰影がよく観察されて描いてあるのが思いがけなかった。

「素敵ね、こんな風に描けるんだ」

絵心のない私だが素直にそう思った。

「全然まだまだ。でもね、先生が細かく指導してくださいさるの」

と言いながら彼女は次々にページをめくった。静物画や赤瓦の家々の風景画などが確かな構図で何枚も描かれている。

「お父さんの絵の才能はあなたに引き継がれたんだね」

父が描いた沢山の絵を思い浮かべながら私が言うと、妹も感慨深そうに

「お父さんの絵、懐かしいね」と窓外の蘇鉄そてつをみやった。

料理が運ばれてきた。ためいきが出るほど繊細で美しい一品一品。沖縄の旬の食材を使いつつ、いかにも手間ひまをかけた彩り豊かな日本料理に舌鼓をうちながら、私たちは際限のない思い出話に身を任せた。

六十年ほど前、父は様々なものを手作りしていたが絵も描いていた。元旦には自家製の掛け軸が床の間に飾られた。例えば寅年生まれの私のために描いた虎の絵の掛け軸は迫真的で、今にも絵の中から飛び出してくるのではないかと思われるほどだった。一休さんが將軍様に「さあ、虎を縛り上げますから追い出して下さい」というとんちの場面に、私は父の掛け軸の虎を思い浮かべたものである。天上の雲をめがけて昇る雄々しい龍や、松竹梅、鶴の掛け軸もあった。肖像画や風景画もあったが、扇のように枝を張った美しい蘇鉄の絵も懐かしい。六号の絵だったと思う。

「あんなに沢山の絵も、みんな無くなっちゃったね」

唇を真一文字に結んでいた妹が言った。

昭和三十七年、父は三十五歳で、結核の外科手術を受けたがうまくいかず手術の途中に世を去った。以前から父は入退院を繰り返していたので、療養所で出会ったという友人たちが時々家にも出入りしていた。彼らの中には父の絵を気に入ってくれた人が何人かいたが、その中の一人、S氏には父の死後、度々我が家を訪ねてきては、父の絵を一つ、またひとつと持ち去ったのである。祖父母や若い母、六人の幼いきょうだいはS氏のなすことに無力だった。気がつくくと、父の絵は一枚も手元に残っていないかった。「今思えば悔しいね。でもあの頃、戦後十七年が経っていたとはいえ周りもみんな貧しくて、私たちは子どもだったし、大人たちは生活のことに精いっぱい絵のことを考える余裕はなかったと思う」

しみりとしつつも、妹が水彩画を始めたことが妙に感慨深く、失くしていたものがひょっこりと目の前に現れたような気分になっていた。そう

いえば妹は小さいころからよく絵を描いていたし、彼女の子どもたちも絵のコンクールで度々入賞を果たしている。

父の絵は残っていない。画風も父と妹では違う。しかし……。父は確かに私たちに絵を残してくれたのだ。そう思った。

美味しい料理を堪能しホテルを出ると、久しぶりの青空が広がっていた。生い茂ったガジュマルの木々のあちこちに、鮮やかな黄緑色の新芽が萌出ている。私たちは心軽く歩いた。風が頬をなでて心地よかった。春たちぬ。